田島めぐり

明治時代に、下新田、小田、渡田、大島、中島、田辺新田の六つの村が統合され「田島村」と命名されたことが、田島という地名のはじまりです。

豊かな農漁村と臨海工業発展の歩み

江戸時代の田島地域は、川崎周辺、大師河原と同じく川崎領に属するとともに、幕府が直接支配する天領でした。元和９年（1623）の川崎宿の開設以降、往来する旅人や大師様への参詣客でにぎわうようになりますが、周辺の村々は宿場への人馬の提供などが義務づけられ、とても苦労をしていました。二ヶ領用水の開削により農業用水の確保がかなうと、稲作・畑作が発展し、海辺の開拓も進んで多くの新田村が生まれ、また、遠浅の海は魚介類の豊富な漁場となり、沿岸の村々は半農半漁で生計を立てました。明治以降は、梨や桃、無花果、葡萄など果樹栽培も盛んになります。のどかな農漁村風景が広がっていた田島地域ですが、明治時代末期に大きな変革がもたらされます。田島村の沿岸を起点として海浜の埋立事業が開始されました。続々と工場が建設され、住宅地や交通網の整備・拡充も進められ、今日の京浜臨海工業地帯としての歩みがはじまりました。田島地域、そして川崎市はその中心地として大きく発展していくことになります。

❶ 小土呂橋

江戸時代のはじめ、「新川堀用水」と東海道の交わる場所には、「小土呂橋」が架かり、多くの人々が行き交いました。寛保２年（1742）、洪水後に架け直された新しい石橋は、その後の 190 年もの間利用されました。昭和に入って堀と橋は埋められてしまいました。撤去されずに保管されていた親柱（擬宝珠）は、50 年の時を経て交差点脇に復活します。また、道路陥没の復旧時に発掘された「小土呂橋遺構」は、稲毛神社の境内に鎮座しています。

❷ 貨物線廃線跡

大正７年（1918）５月、川崎駅と浜川崎駅間 4.1km、臨海部の工場地帯までの初となる貨物専用の鉄道路線が内閣鉄道院の手によって開通しました。昭和 48 年（1973）に廃止されるまで、日本各地と川崎臨海部との貨物輸送に活躍しました。現在でも八丁畷駅近くの京急の線路際のレンガ造りの橋脚跡や市電通りの JR 線下の壁面の台座跡などにその名残を見ることができます。

❸ 妙遠寺・泉田二君功徳碑

正式名称は日蓮宗長継山妙遠寺。第二次大戦後の昭和 27 年（1952）に砂子から現在の場所に移転しました。境内にそびえる「泉田二君功徳碑」は、二ヶ領用水を完成させた小泉次大夫と、二ヶ領用水の大改修や多摩川の築堤を成し遂げた田中休愚の二人の偉業を讃えて明治時代に建立された“水恩の碑”です。碑の額は当時の内閣総理大臣・黒田清隆の筆によるものです。

提供：田島小学校

❹ 田島郷土資料館（田島小学校）

田島小学校内の教室を活用して一般公開された郷土資料館。子供たちが様々に学び、田島の歴史を肌で体験できる施設にしようと、囲炉裏と障子、襖のある畳部屋、かまどと流しのある土間が復元されました。昔のくらしや戦時下の生活が再現され、のどかで豊かな農村地帯だった昔懐かしい田島地域が今に甦ります。

❺ 新田神社

鎌倉幕府を倒した武将・新田義貞を祀る神社。南北朝期、越前国で足利方と争いを続けた末、討死した義貞の遺品を渡田に持ち帰って奉納したと伝わるのが『新田四天王』（義貞の四重臣）の１人、渡田を領地として治めていた亘新左衛門です。毎年８月、各町内の神輿が集い練り歩く新田神社例大祭では、区内在住の新田四天王の末裔の方々も式典に参列しています。

❻ 成就院

正式名は明王山聖無道寺成就院。真言宗の寺で、代々寺子屋を営み地域の中心的な役割を担ってきました。境内には、関東大震災による日本銅管（当時）の 43 人の犠牲者を供養する「殉職者之碑」のほか、多くの板碑や石仏が並んでいます。本堂前の樹齢 300 年ほどの大きなソテツの木は、戦災での大きな損傷から奇跡的な復活を遂げたといい、今でも立派な樹勢を誇っています。

提供：二ヶ領用水・町田堀の会

❼ 町田堀（二ヶ領用水）

江戸初期に開削された二ヶ領用水。鹿島田堰（幸区）で大師堀と分岐した町田堀がさらに渡田堀、小田堀などの用水路に分かれ、現在の鶴見区矢向から渡田・小田・浅田にかけての川崎区南部の水田地帯を潤しました。“悪水堀”の一つ、「天飛川」は今の新町から渡田小、浜川崎駅付近を流れ、田辺運河に注いでいました。「二ヶ領用水・町田堀の会」は、今は失われた町田堀の水路図づくりなど熟心な取り組みを続けています。

❽ 圓能院

正式名称は金澤山圓能院福泉寺。真言宗の寺で、創建は平安時代と伝わります。約 2000 坪の境内には川崎区最古の石造の地蔵菩薩像といわれる「光性院鐘海禅師地蔵像」などがあります。成就院から圓能院、鶴見区の菅沢町へと続く道をかつては菅沢道といい、圓能院前は「寺ノ前」と呼ばれていました。明治６年（1873）の学制施行により小田小学校が開校するまで圓能院に小田学舎という寺子屋が置かれていました。

❾ 日枝大神社

創建は平安時代の天歴２年（948）で、平成 20 年（2008）で 1060 周年を迎えた古社です。境内の奥に残る旧鳥居の柱は、宝暦６年（1756）建立の川崎市で最古とみられるもので、旧幕臣・池田忠政が明治時代に川崎宿周辺を訪ねて綴った『異老忠政遊覧記』に図解で紹介されています。関東大震災での倒壊後、現在の御影石の鳥居が再建されました。

❿ 追分まんじゅう

平成 17 年に創業 50 周年を迎えた和菓子店「多摩川」が、創業まもなくの頃に、半年間も試行錯誤して考案し、以来一途に製造販売を続けています。薄皮まんじゅうにきな粉がまぶされた昔懐かしい味わい。吟味した原料を使ってひとつひとつ丹念に作られ、今では「かわさき銘菓」の一つとして広く親しまれています。

⓫ 大島八幡神社

御祭神は誉田別命（応神天皇）。いざなぎの命、いざなみの命も合祀されています。八幡太郎義家が前九年・後三年の役（1051 ～ 1087）に出陣した際、大島村の村人たちが宿や兵糧を提供し、源氏一族が感謝の印として神社を建立したと伝わります。境内には、明治時代、大島村の特産品・伝十郎桃をはじめ果樹栽培の盛んな地であったことを記念する「温故知新の碑」が立ち、かつての大島村の姿を今に伝えています。

提供：大島劇場

⓬ 大島劇場

終戦の傷跡からようやく復興の兆しを見せはじめた昭和 25 年（1950）に創業し、住宅街の一画に今も残る貴重な大衆劇場です。かつては川崎区内に 18 軒の演劇場があったといいます。一つの劇団が１ヶ月間公演を行う上、役者との距離感は限りなくゼロに近く、舞台と客席の一体感を味わうことができます。

⓭ 大藤橋遺構

二ヶ領用水の支堀の一つの川崎堀が、鹿島田（幸区）で分岐した大師堀と町田堀。大師堀は大師河原方面の水田を潤しましたが、今では全く姿を消してしまいました。若宮八幡宮境内の九橋の一つの欄干や平間寺の鶴の池などにその名残をとどめています。大師堀から分流した中島堀や藤崎堀が合わさった六百代川（観音川）に架かっていた大藤橋の親柱もその一つです。

提供：桜本商店街振興組合

⓮ 桜本九福神

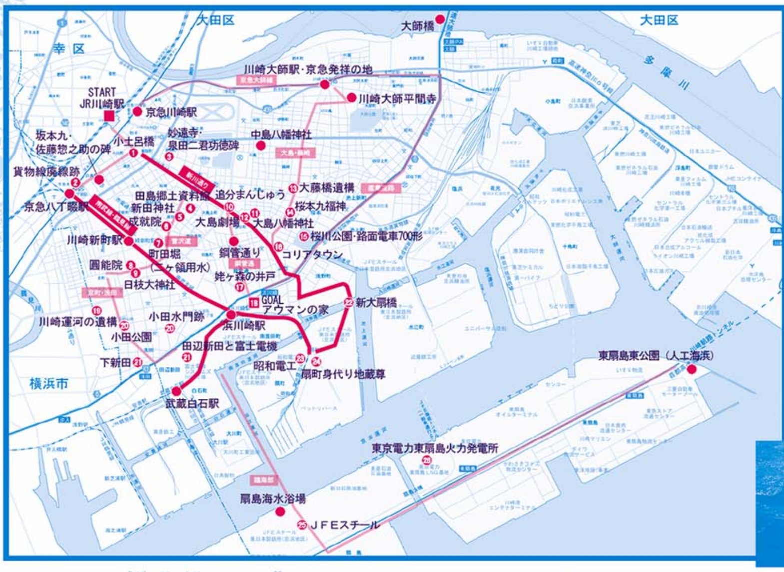
「日本のまつり」で有名な桜本商店街のシンボルが「桜本九福神」。従来の七福神に、「上向小僧」と「招福芙」という新たな神様を加え、生誕の 1999 年にあやかり九福神となりました。上向小僧は坂本九さんの大ヒット曲、招福芙は商店街のシンボルマークの招き猫がモチーフとなっています。日本のまつりは、御輿練りやプンムルノリ（韓国・朝鮮の伝統能楽）をはじめとする国際色豊かなイベントで、毎年多くの人出でにぎわいます。

⓯ 桜川公園・路面電車700形

平成 18 年にリフレッシュパーク事業によってリニューアルされ、以前からのソメイヨシノと新たに植えられた河津桜が咲き誇る中「おおひん地区・春の祭」で毎年にぎわう桜川公園。一角には、戦中・戦後に区民の足として活躍した川崎市電の車両が保存されています。昭和 19 年（1944）に開通し、川崎駅から市電通りをまわって桜本までをつなぎ、戦後は塩浜まで路線を伸ばしました。

⓰ コリアタウン

大島四丁角より産業道路までの通称セメント通りを中心とする浜町・桜本の一帯が「コリアタウン」で、大正から戦時中にかけて朝鮮半島から川崎に移り住んだ人々が多く居住し、発展してきました。今は“多文化共生”の街として、焼肉などの食文化を中心に日韓友好の架け橋になっています。焼肉屋の他にも香辛料など韓国の食材を直輸入販売している店もあり、手頃な価格で本場の焼肉や韓国料理を味わうことができます。



浅野総一郎と臨海工業地帯の誕生

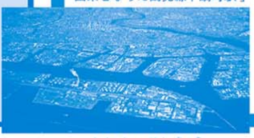
江戸時代中頃からの新田開発にはじまり、明治以降の本格的な埋立事業によって造成されてきたのが、現在の川崎港であり京浜工業地帯です。明治以降の埋め立て総面積は 20.76k㎡にもおよび、川崎区の面積 40.25k㎡（平成 19 年 9 月現在）の半分を超えるに至りました。

明治 29 年（1896）、浅野総一郎は、永年の夢であった海運業を興すために東洋汽船を設立。外遊先の欧米諸国で、発達した港湾施設に目を奪われた総一郎は、帰国後すぐに川崎から鶴見の海岸部に近代的な港湾の建設と東京・横浜を結ぶ運河の開削を決意したのです。明治 41 年（1908）に「鶴見埋立組合」を結成、国の許可を得て大正 2 年（1913）に着工、翌年に創立させた「鶴見埋立会社」（現・東亜建設工業）の手によって、昭和時代前期にかけて、川崎の海の大改造プロジェクトが進められました。

浅野家の家紋が駅名の由来となった鶴見線「扇町駅」

新たな埋立地には「日本鋼管」（現・JFE スチール）を筆頭に大手企業の工場が次々に進出し、総一郎も「浅野セメント」（現・太平洋セメント）など多くの工場を設立するとともに、南武鉄道、鶴見臨港鉄道など鉄道網の整備にも力を尽くしました。

このように田島地域を中核として、京浜臨海工業地帯は大きな発展をとげていきました。



⑰ 姥ヶ森の井戸

鋼管通 3 丁目付近は昔、義貞の重臣・亘新左衛門の土地で「姥ヶ森」と呼ばれ、義貞が寄進した御手洗池の跡と伝えられる古井戸が今も残されています。傍らに祀られていた祠は、明治 12 年（1879）頃に新田神社の境内へ移され「姥ヶ森弁財天」と命名されました。新田神社は稲毛神社「川崎山王祭」にて大神輿が渡御する御旅所の一つで、当日は姥ヶ森の井戸で汲んだ御神水が弁財天に供えられます。

⑱ アウマンの家

日本鋼管創業当時の明治 45 年（1912)、ドイツからアウグスト・アウマン氏ら職工長 3 人と技術士 1 人が招かれました。宿舎として建てられた洋館が「アウマンの家」です。第 1 次世界大戦が始まると 3 人は帰国しますが、アウマン氏だけは日本に残り日本女性と結婚、昭和 15 年（1940）までこの家で暮らしたといいます。一度は取り壊されますが、後に記念資料館として復元され、現在は一般開放されています。

⑲ 川崎運河の遺構

横浜市鶴見区との境界付近の京町緑地には、大正 11 年（1922）に造成された「川崎運河」の痕跡をとどめるコンクリート製の防潮壁が残っています。沿線の開発を目的に京急電鉄が運河の開削と両岸の埋め立てを行って工業用地を造成し、後に高級住宅地として分譲したのが現在の京町と鶴見区平安町（当時の浜町）です。川崎運河には船舶が行き交い、ボラ釣りやカキ採り、子供達の遊び場として親しまれました。

⑳ 小田公園と小田水門跡

小田公園では、小田まちづくりクラブ（小田公園花壇づくりの会）の方々の熱心な活動によって花壇の維持管理が行われています。町田堀（二ヶ領用水）が枝分かれした用水路の一つ、小田堀は小田・浅田地域を潤し、小田6丁目にあった小田水門から田辺運河へと排水されました。埋立や撤去により、現在その面影を見ることはできませんが、住民からの要望によって「小田水門跡」という交差点の名前が付けられました。

提供：富士電機システムズ㈱

㉑ 下新田と田辺新田（富士電機）

二ヶ領用水完成の後、川崎の海浜部で最初の新田開発が始まり、元和 4 年（1618）に誕生したのが「下新田」（現在の浅田 3 ～ 4 丁目）でした。江戸時代最後に開かれたのが「田辺新田」で、田辺家が地主経営を続けましたが、大正 12 年(1923)に富士電機製造(現・富士電機グループ)に土地を譲り、最新設備を誇る川崎工場が完成しました。こうした大工場の進出によって、下新田地区は人口が急増し、“夜店通り”というにぎやかな商店街も生まれました。

提供：JFE スチール㈱

㉒ 新大扇橋

浅野運河の入口にある JFE スチール所有の長さ 84 メートルの跳ね橋で、船が航行するときにサイレンが鳴り橋が持ち上がる仕組み。昭和 14 年(1939)に建造され、大島・扇町地区を結ぶことから「大扇橋」と名付けられ、後に 2 回の改造・改修を経て、昭和 59 年（1985）に全面改修が施され「新大扇橋」と改称されました。船からの連絡を受けると信号機と遮断機で交通を止め、巨大なジャッキにより約 10 分かけて橋が持ち上がっていきます。

㉓ 昭和電工

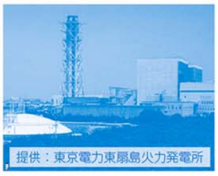
扇町の埋立地が竣工したのが昭和 3 年（1928)、3 年後には昭和肥料（現・昭和電工）の工場が完成し、日本初の国産技術によるアンモニアの合成に成功しました。敷地内に「アンモニア工業発祥の地」記念碑が建ちます。同年に建造された本事務所は、昭和初期の京浜工業地帯を代表する工場建築の一つ。急勾配の吹抜けの階段やステンドグラスなど、当時の洋風建築の面影が色濃く漂い、現在も昭和電工の本事務所として使われている建物で、国の有形文化財にも登録されています。

㉔ 扇町身代り地蔵尊

昭和 20 年（1945）の川崎大空襲、多くの軍需工場があった扇町は激しい空爆にさらされ、多くの犠牲者が出ました。昭和 49 年（1974）7 月 25 日に戦災の供養、そして交通安全、工場の操業安全を祈願し、「身代り地蔵尊」が建立されました。現在も町内会と各企業の方々による清掃などが熱心に続けられています。交通量が多い場所にもかかわらず、未だに無事故であるといいます。

㉕ JFE スチール

臨海部の埋立地に進出した大工場の第 1 号が、明治 45 年(1912)に白石元治郎が創業した日本初の鋼管の専門会社・日本鋼管でした。若尾新田（現在の南渡田町）の一角を購入、埋立てと工場建設を進め、翌年に操業をはじめました。工場への通勤と物資輸送の不便の解消のため新たに造られた道が今の鋼管通です。扇島の「JFE 歴史資料館」（団体見学受付・要予約）には日本鋼管の歴史を物語る多くの資料が展示されています。



提供：東京電力東扇島火力発電所

㉖ 東京電力 東扇島火力発電所

東扇島には東京電力の火力発電所があります。昭和 59 年（1984）に東京電力初となる自前の LNG（液化天然ガス）燃料基地が誕生、その後、火力発電所も完成しました。LNG 基地は 6 万 kL のタンク 9 基が並び、1 隻のタンカーから約 1 日をかけて全ての LNG をタンクに送るといいます。約 50 万㎡の敷地の¼ 以上に、大小 21 万本の樹木が植えられ、20 年近くが経過した現在、人工島に豊かな森が形づくられています。

田島地域の鉄道網の発達

●鉄道院貨物線・南武鉄道（JR 南武線） 内閣鉄道院による川崎駅と臨海部を結ぶ初めての貨物専用線が開通したのは大正 7 年(1918)。その 2 年後に多摩川の砂利運搬を目的に、民間によって南武鉄道が設立されました。当初の経営難を浅野総一郎が救い、昭和 4 年(1929) に川崎・立川間が開通。翌年には尻手・浜川崎間の浜川崎支線も開通し、奥多摩から浅野セメントの工場まで、石灰石の効率的な輸送が可能となりました。石灰石列車は平成 10 年(1998)まで南武線の風物詩として活躍しました。

昭和10年頃の鉄道路線

●海岸電気軌道・鶴見臨港鉄道（JR 鶴見線） 産業道路は、かつて堤防と松並木が延々と続く風光明媚な海岸線でした。明治末より埋立事業が始まると、大正14年(1925)に海岸電気軌道が発足し、川崎大師と総持寺を結ぶ通勤路線が開通しますが、昭和 2 年(1927) 開業の鶴見臨港鉄道によって電気軌道は合併され、やがては産業道路の拡張にともなって電気軌道は廃止されました。鶴見臨港鉄道の駅名の由来について。「武蔵白石」は日本鋼管創業者・白石元治郎、「大川」は製紙王で日本鋼管二代目・大川平三郎、「昭和」は昭和肥料（昭和電工の前身)、鶴見区の「浅野」は浅野総一郎。その多くが臨海工業地帯の創生期に活躍した実業家などにちなんで命名されました。

JR 南武線

JR 鶴見線

武蔵白石駅

昭和のはじめの海水浴場

現在の扇島が誕生するよりずっと昔、川崎の海の沖合に『扇島海水浴場』が開業したのは昭和 6 年(1931) 7 月のことでした。京浜運河の開削工事が始まり、海底から掘りあげた土砂の投棄場所が扇形の砂州となり、やがて鶴見臨港鉄道の経営による海水浴場へと発展しました。海の家も備えた“遠浅・近い・きれい”の三拍子そろった海水浴場として、ひと夏に 20 万人もの大勢の人出でにぎわいました。鶴見臨港鉄道には戦前まで「海水浴前」駅が夏季限定で開業し、ここから海水浴場まではポンポン蒸気による渡し船が 15 分ほどで海水浴客を運びました。昭和 30 年代(1955 ～) の扇島の埋立工事の本格化にともなって海水浴場は姿を消しました。

扇島海水浴場（左）と渡し船の風景（昭和 13 年 8 月）
写真提供：倉形泰造氏

東扇島東公園のオープン

扇島海水浴場の廃止から、ほぼ半世紀が過ぎた平成 20 年 4 月、川崎の臨海部に砂浜が復活しました。「かつての渚の風景を再現したい」。そんな市民の強い要望が実を結び、長さ約 150m の人工海浜「かわさきの浜」をはじめ、潮入りの池、潮風デッキ、バーベキュー広場、多目的広場などを擁する広大な『東扇島東公園』が開園しました。災害の発生時には、首都圏の「基幹的広域防災拠点」として活躍します。

川崎宿ができて 400 年目となる 2023 年に向け、地元の人々による『東海道川崎宿 2023』が発足しています。川崎宿の文化と歴史を活かしたまちづくりなどの活動を進めています。

編集　東海道川崎宿 2023・各まちづくりクラブ　発行　川崎区役所　協力　NPO 法人 かわさき歴史ガイド協会
問い合せ　地域振興課　☎044-201-3136
※川崎区内の小学校にもご協力いただきました。